

湊祭復元事業と三番組の纏まとについて

渡邊 久美子

今年度、当館では文化庁の支援を受け、関係機関や市民団体と「みなと新潟実行委員会」を組織し、湊祭復元事業を実施しています。

湊祭とは、現在の新潟まつりのルーツの一つに数えられる、江戸時代から新潟町で行われた住吉社の祭りです。七夕に行われたことから七夕祭りとも言われました。湊祭は明治五(一八七二)年に県令楠本正隆により禁止されますが、以後復活と中止を経て、戦後新潟まつりとなり、その情景は今日の住吉行列に引き継がれています。

湊祭復元事業では、江戸時代の湊祭について、古文書等の資料調査を行い、その成果をパネル展等で紹介し、地域文化の理解を深め、これからの町づくりを活かすことを目的としています。

では、この湊祭とはどのようなものだったのでしょうか。江戸時代の湊祭について、天保十四(一八四三)年十二月の「新潟市中風俗書」から紹介します。祭りは七月一日より七日までの期間に行われ、新潟町を二十二に分けた各組が参加するものでした。一日から六日は、各町の町内で祭り太鼓が叩かれ、夜は大鼓や笛のお囃子とともに子どもたちが小さな灯笼を手に歩きました。湊祭が最も賑わうのが、七日の住吉神の神輿渡御です。神輿は前日六日、住吉神の

故地である洲崎町の御旅所(神輿を安置する場所)へ移されます。七日朝に、洲崎町が一番組として神輿を船に乗せ渡御が始まります。神輿渡御には、八番組までを昼祭、九番組から二十二番組までを夜祭と分けて、昼夜に分かれて祭りを賑わせました。

昼夜の湊祭の行列を列記した嘉永二(一八四九)年「湊祭番附」を見ると、昼は纏、傘鉦、踊屋台、夜は纏灯笼、町内提灯などと今の新潟まつりでは見られない出し物があったことがわかります。これら個々については後日に譲るとして、今回は「纏」という出し物について紹介します。今年七月、事業の一環として博物館に寄贈されていた部材を組み立て、約一ヶ月程展示を行いました。

纏と言うと、町火消しが振るうものが想起されますが、湊祭では各組の象徴として、行列の先頭に出されたものであったことが古文書から伺えます。纏は昼祭に出され、数人で持つものや車の付いたものだったようです。纏ごとにそれぞれ装飾があり、その詳細は文久三(一八六三)年の「湊祭行列帳」、新潟町の役人だった早川清作が明治二二(一八八八)年に記した「星霜雜記」からわかります。

今回、事業で組み立てた纏は、三番組のもので、三番組は、江戸時代は本町通十七軒町、同十四軒町、大川前通十七軒町、同十四軒町から構成され、現在の本町通十一番町、上大川前通十一番町に相当します。この纏は戦後、本町通十番町の方々が管理し、新潟まつりの住吉行列に曳き出されてきました。

三番組の纏は、台の周囲と腕木に黒漆、擬宝珠の高欄には朱漆が施され、「三番」と書かれた額、翼を広げた丹頂鶴、金色の雲間からのぼる日の出をあらわした装飾が目立ちます。この纏の製作年は、資料が見当らず、よく分かりません。しかし先述の「湊祭行列帳」に

「纏 車付 壹本 但日ノ出ニ鶴之図 中六尺高一丈五尺」、「星霜雜記」には「纏 日ノ出ニ鶴之図 幅六尺高壹丈五尺 車付挽物」とあり、江戸時代の装飾を引き継いでいるものと思われ、纏の中心に一本の柱を据え、額を掲げていますが、本来は柱の先端に剣が取り付けられていました。戦後、祭りに出した折り、電線に当たると柱を替え、今回組み立てたように、剣は台の隅に取り付けるようになりました。戦後の住吉行列の様子を旧蔵者である本町通十番町の方(大正十五年生)に伺ったところ、年によって学校町や榎谷小路に向かうこともあったそうですが、大抵の順路は五菜堀で下町から渡御してくる

御座船を迎え、広小路まで供奉したそうです。網干嘉一郎氏が「新潟市文化財調査報告書二(一九七三年)」で、三番組のほか、四、五、八、二十番の纏の存在を述べており、八番組が現在も住吉行列に纏を曳き出していますが、その他の番組のものも所在は不明です。湊祭に関する実物資料は少なく、三番組の纏はかつての祭りの賑わいを伝える貴重な資料と言えます。

(わたなべ くみこ 学芸員)



『小さいおうち』考

小説『小さいおうち』(中島京子二〇一二年、映画化二〇一四年)には、総力戦時代の近現代史が縮図のように取り込まれている。この作品の主人公、女中のタキは主人の時子の使いで、時子の姉を訪ねる。そして帰ってこう報告する。

「この前の地震で、東京中がすっかり焼けて、あれだけ家だの財産だの、持つもんじゃなくなって思い知らされたのに、よくママ建てる気になったわねえ、と、こうおっしゃるんですよ」

大正十二(一九二三)年の関東大震災後、昭和初期にサラリーマン家庭である時子の家では、東京の山手に「中廊下型」の間取りの「小さいおうち」を建てた。昭和二(一九一七)年に雑誌「住宅」が主催した、①「家五人(夫婦、子供二人、女中一人) ②「造作付きで二五〇〇円という条件の設計コンペで、「中廊下型」の家が一位になっている。流行の住宅に資力を費やす妹時子に、姉は厭味を言ったのである。

さらにタキは、時子の姉が「教育熱心」で、難関中学校を目指

す息子の「お受験」に入れ込んでいと、皮肉っぽく時子に報告する。姉は「家だの財産だの」のほかなさを感じ、子供の教育、進学に期待を寄せ、教育費を惜しまない。

日本が大正デモクラシーを経て総力戦へ向かう昭和初期、家族史の流れのなかに「小さなおうち」も「教育熱心」も現れる。

小林嘉宏は、大正期に子供は常に「教育的配慮の眼差しに曝され続け良い子」として振る舞うことを期待されるようになるが、これは子供にとって「幸福」なことかと問う(「大正期『新中間階級』の家庭生活における『子供の教育』」(『福井県立大学論集』第七号一九九五年)。また、高額の教育費を親が負担するという政策もこの時期に淵源があるという。

モデル化された「小さなおうち」に住んだり、子供の教育に力を注いだりする家族のありかたが、総力戦時代にはじまり、現代につながっていることは軽視できない。

収蔵資料紹介

二代目昭和橋の橋名板

現在、信濃川の河口近くから数えて四番目に架かっているのが昭和橋です。昭和橋のルーツは戦前にさかのぼります。これまでに二度架け替えが行われ、初代と二代目の橋は「昭和橋」と呼ばれていました。

昭和橋が建設されるきっかけとなったのが、大正十二(一九二三)年の大津分水の通水でした。信濃川に新しい河口が開かれ、もともとの河口だった新潟市付近では水量が減って両岸の埋め立てが可能となったのです。昭和三(一九一八)年から萬代橋上流の埋め立て工事が始まります。埋立地の開発を促進するために県会議事堂付近(一番堀通り)と鳥屋野を結ぶ新橋の建設が昭和五年七月から始められました。これが初代昭和橋で、翌昭和六年八月二十日に開通しました。橋は橋長約三〇五メートル、幅員七三メートルの木造橋で、橋板の上に土や砂利を敷いて補強をしていました。

初代昭和橋は約十八年間使われました。しかし痛みが著しくなり、昭和二十四年七月から昭和橋の架け替え工事が行われ、同年十二月六日に開通式が行われました。これが二代目の昭和橋です。二代目昭和橋は橋長約二八〇メートル、幅員六メートル、引き続き木造の橋で、土や砂利を敷いた構造でした

が、バスやトラックの通行も考慮し二〇トンの重量に耐えられるよう初代より強固に設計されていました。なお、架け替え工事の際には船による代替輸送が行われました。当時の新聞には非常に混雑している様子が報じられていて、昭和橋が市民生活に欠かせないものになっていたことがわかります。

昭和三十九(一九六四)年の新潟国体開催に合わせて新橋(現在の昭和橋)を架橋することとなり、二代目昭和橋は昭和三十七年三月からの架け替え工事によって解体されました。博物館に残る橋名板は縦二〇センチ、横四〇センチの銅製と推定される板二枚で、「昭和橋」「昭和二十四年十二月竣工」の銘があります。約十五年間という、短い使用期間だった二代目昭和橋の歴史を伝える資料です。

(田嶋 悠佑 学芸員)

